

春の暮より

柴舟

病みて

天地のものゝ斜になりぬやと思へばわれのうすめまひする
初夏の日ごと夜毎をねてあれば病てふさへうち忘れつゝ
とこしへにわれと等しき人はあらし思へばこの身愛すべきかな

観櫻御會の日新宿御苑にて

行幸まつ苑の廣道針葉樹細かに春の影おとしたり
うちならび額づく前をかゞやかに春の日のごと君は過ぎます
くれなるの花の小さが満てるかな君がふましし苑の御芝生
捧げもつ大御杯ゆたかにもたゝふ葡萄酒の色はも

濱離宮にて

松の風ふきし暮れば咲きつゞく八重の櫻ぞ競ひ袖振る
新しき匂を立つるこゝちして楠の若芽ぞ風に光れる

豊島野

賛助員 太田光子

豊島野は丘べもしどに家して住む人多くなり
にけるかな
麥の芽は踏みにじりつゝ豊島野は昨日も今日も
家たていそぐ
豊島野の麥生は市となりにけり鬻ぐさなかにほ
こり風ふく
百樹立芽ふきそろひて豊島野は家居苦しき春さ
りにけり
うつうつと芽ふく木立のこちごちにすみて悲し
き人殖えにけり
物思ふと寝ず起きたる朝けにも休まれなくにわ
が世のわざは
玉くしげ明くるあしたの疲るれば寝んとし思ふ
惜しき此の夜を
夜くだちにいやつぎおこす火はあかし忘れじと
思ふ人のことの葉
あかつきと鶏はなくなり疲れたるわが身はいま
だねむられなくに

村肝の心に思ふこと云ひてすがすがしかも今宵
のこゝろ

つぎおこす炭火の燃ゆる夜をふかみ歸るといふ
か寂しき家に
屋根並めて里わしづけき春の日に芽ふく梢の聲
をこそきけ
うちはへて家なみしけば芽花さく豊島ののべは
都となりぬ
すゝけむり遠くなびきてかつしかの稻田のはて
に見えず筑波も
豊島野は里住みよしと移りきて八十氏は家た
てにけり
驚きて走りたりけり村の奥道のとまりに河の淀
みゆれば
潮さして瀬鳴り聞えず大河をそばに來る迄知ら
ざりにけり
塀にそひ獨歩める宵深し凍てそめて土は濘らざ
りけり
立とまりまけば寂しも人の聲向ふに消ゆる長塀
にそひて

足の音をはさがるよしもあらなくに踏みさびし
めり夜の濤りみち
おのづから夜は淋しき塀のかけ少年はうたをう
たひ行けるも
少年の唱歌遠ぞきあとのやみ塀ながと夜は
ふけしづむ
鳴るものに汽笛遠寺の鐘の聲よるはひとしほ深
からんとす

せんせい

賛助員 岩田 ふみ

せんせいと呼ぶるゝ事のうれしさに馴れきてあ
はれ幾とせかへし
せんせいと呼ぶるゝ事のうれしさも馴るれば何
かもぞたらはぬ
カシミヤの袴のすそうすら褪め吾がさびしさぞ
こゝにつごへる
不公平はせじと思へごかくに撫でてやりた
き生徒の一人あり
さとされて泣きいづる生徒とさとさねばならぬ
この身といづらかなしき

白き衣まれば吾が身も淳しげになやみのかげの
ありとしもなき

朝曇り

賛助員 安永みち子

朝曇りの空のしめりにたかだかと白き月こそか
ゝりてゐたれ
朝月の白きが高くかゝりぬる櫻芽ふきぬひとよ
のひまに
朝の月あをみてゆくと思ひけり櫻の芽おきあを
き木うれに
はつとして朝の月を仰ぎみる心に高き櫻なりけ
り
たけたかき櫻芽ふきぬほのあをき梢に朝の月あ
りにけり
死にしやうに龜はからだをかたぶけてねむりて
ぞをるよあけの池に
しらじらとあくれば池のものかげの龜のせなか
の匂ふさあをに

生徒をさとす言葉ひしひし身にあたり逐はるゝ
如く出でし教室

黒板のぬりかへられし快さいはでものこと教へ
けるかな
後毛をつとかきあぐる教ふべき事忘れたるもの
わびしさに
天才のいく人が出でん心地してしきりに生徒ら
のかはゆき日かな
あまりにも慕ひよる生徒の一人ゆる教師が得た
るうき名さびしも

△ △ △

蚊がなければ夕べとなればいやまして夏のあはれ
の身にせまるかな
蛙なく夜ごと夜ごとを母と居り涙わりなき日の
つづきけり
雨はれし夕べの窓のそよ風にほのぼのとときく遠
蛙かも
夕されば日静やかにてりいでて木の影ながき家
にわがすむ

ふかぶかと龜はねむりあさあけの光しづかにさ
し入る池に

目しひたる小鳥かくれてあるらむか光とごかぬ
あを葉のしげり
桐のかげうごかぬ土をはふ蟻のあはたゝしもよ
小さき蟻の
芍薬の葉かげに白き蟻のゐてねむれるらしもゆ
ふべもしらす
匂やかに杉菜のびたりやわ土の土手の赤土に杉
菜のびたり
赤土に杉菜すいすいのびてゐたり手もふりがた
し杉菜すいすい
赤土のしめらぬほごに雨はふり杉菜の瑞葉ふし
らみにけり
涙をばためたる様と思ひけり土手の杉菜の雨に
濡れつゝ
赤土の土手の杉菜にかくすべき物思ひならずい
ざみにゆかな

□

□

□